

マタイによる福音書5章1-2節 「山上の垂訓」

1A 御国の福音

1B 悔い改め

2B パリサイ人と律法学者

3B 弟子たち

2A 山上における教え

1B 新しい戒め

2B 律法と恵み

1C キリストの死

2C 聖霊の力

3C 霊的祝福

4C 伝道

3A イエスの教え

1B すべてを信じる

1C 八福

2C 弟子たちへの言葉

3C 歪曲しないための知恵

2B 全体の構成

本文

マタイによる福音書 5 章を開いてください、私たちはこれから、山上の垂訓をじっくりと学んでいきたいと思えます。5 章 1-2 節を読みます。「1 その群衆を見て、イエスは山に登られた。そして腰を下ろされると、みもとに弟子たちが来た。2 そこでイエスは口を開き、彼らに教え始められた。」

1A 御国の福音

「山上の垂訓」あるいは「山上の説教」という言葉を聞いて、聖書に親しんでいる人や、キリスト者であれば、一定の興味を持っていることでしょう。そこに書いてあるイエス様の教えは、私たちがひきつける何かがあります。私が個人的に魅力的に感じているのは、これが、「御国の福音」として語られていることです。4 章 23 節に、「イエスはガリラヤ全域を巡って会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病、あらゆるわずらいを癒された。」とあります。イエス様が、教えられたのは、単なる言葉だけではありませんでした。ご自身が主権を持っておられて、事実、そこで人々の病が癒されていく力が現れたのです。このように、イエスが主となることによって、そこに神の国が現実のものとして広がっていく、それが御国の福音です。私たちの心を和ませるだけであれば、たくさんの良いお話があります。しかし、その人の生活は変わらない、その人の心の王

座には相変わらず、自分自身、自我が座っている。そうではないのです、政権転覆しなければいけない。自分が王様から、イエス様が王様になる、政権交代が起こらないといけない。それが、天の御国が近づいた、ということです。そして、その御国の宣言として、イエス様は山上で説教を始められます。

1B 悔い改め

バプテスマのヨハネが、イエス様が来られる前に御国の福音を宣べ伝え始めていました。彼の言葉は、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」でありました(3:2)。そして、ヨハネがヘロデ・アンティパスに捕えられてから、イエス様がガリラヤにて活発に福音を伝えられましたが、イエス様も、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。(4:17)」と言われました。御国が近づいたということは、そこに悔い改めがともないます。自分が今までの自我を心の王座に占めている、その姿を変えないといけません。けれども、これは自分自身が死んでいるということを認めないとできません。自分を変えられないといけないと努力して、それで自分が心の王座から降りることはできません。自分には全くできないのだ、ああ、自分は災いだと叫ぶこと、神の憐れみにしかすがること、神の憐れみがないのだということ、これを悟った時に神のほうに向かうことができます。この悔い改めの実を結ぶことを、山上の垂訓では初めの八つの幸い、八福で見ることができます。

2B パリサイ人と律法学者

けれども、バプテスマのヨハネの宣教の時から既に、福音書の最後のところまで、イエス様ご自身も対峙しなければいけなかったのは、パリサイ派やサドカイ派など、宗教指導者でした。ヨハネは、「まむしの子孫たち、だれが、迫り来る怒りを逃れるようにと教えたのか。(3:7)」と言われて、彼らにも悔い改めを迫りました。イエス様が宣教をされた時、彼らの信仰のあり方がなぜ、そのように叱責を受けたのか？一つは、自己義認であったり、自己実現であったり、自分を高めるための手段になっていたことです。自分の宗教のあり方が、自分がいかに正しいかを証明しようとするものであったり、自分の領域を保ち、また広げるようなものであるならば、それは福音から真っ向に対立します。もう一つは、形式化です。外に見える行いだけに目を留めていたので、内側の姿勢がないがしろ、放置されていました。

山上の垂訓を学ぶにあたって、私たち教会が刷新することができます。つまり、教会はいつも緊張状態にあります。危機の中にあります。絶えず、私たちの教会活動が形式化し、ただその活動をしていけばよいという形式化が起こります。そうすると、中身の薄い表面的なもの、その教えも、祈りも、交わりも、また伝道さえも、表面的なもので終わってしまいます。あるいは、活発的に動こうとしているかもしれませんが、そこに自分を満足させるもの、自己実現や自分のためのものになっているならば、それもまた福音の真理から真っ向から対立するのです。このように教会の危機管理と言ったらよいでしょうか、敵から安全に守られるようにすることができるのです。

3B 弟子たち

そこで、イエス様の教えをここで聞いている人々に注目してください。「みもとに弟子たちが来た」と言っています。彼らは、イエス様の行なわれること、語られることを見聞きするためにはいるだけでなく、イエス様と共に生活して、お供をして、それで主であるこの方のようになろうとして、学んでいる者たちです。

2A 山上における教え

1B 新しい戒め

そして、イエス様がずっと弟子たちと時間を過ごされて、行われていたのは、「愛する」ということでした。ヨハネ 13 章 1 節に、「世にいるご自分のものたちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。」とあります。そしてそこで足洗いをされて、弟子たちに互いに仕え合いなさいと命じられました。そして、新しい戒めを与えられます。「わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。(13:34)」神を愛すること、そして互いに愛し合うこと。これが、弟子たちに与えられた戒めです。山上の垂訓は、この新しい戒めに関わる、具体的な教えに満ちています。

2B 律法と恵み

そしてもう一つ、御国の福音は「恵み」に満ちているということです。山の上からイエス様が語られたことに注目してください。ここが、カペナウムの近くで、山腹になっているところでしょう。カトリック教会は、伝統的にここではないかと思っているカペナウムの近くの山腹に、山上の垂訓の教会を建てていますが、イエス様がここで、イスラエルの民がシナイ山の麓に連れてこられて、そこで主がシナイ山から民に語られた時のことを意識しておられるに違いありません。シナイの荒野にあったホレブの山では、十戒を始めとする神の言葉、命令が語られました。それがあまりにも聖く、自分が生きることができているのか？と恐れを抱きました。しかし、イエス様はガリラヤの山において、正しい神、聖なる神の前に近づいた者たちが自分はまだ駄目だと思い、自分のうちには良いものが全くないという、自分に対する圧倒的な無力感、絶望感を抱いた者たちを前提にしておられます。そして、そうした者たちに「あなたがたは幸いです」と恵みの言葉をかけておられます。

しかし、違う面があります。ヨハネが言いました、「律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。(1:17)」律法はモーセによって与えられましたが、神の恵みと真実はイエス様によって実現したのです。山上の垂訓は、あたかも律法の行いによって救われるように聞こえるものがあります。例えば、「もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してください。(6:14)」他の人を赦すことによって、自分の罪も赦され、天の御国に入るのか？とってしまうかもしれません。いいえ、弟子たちに語っているのは、神がすべての罪を赦してくださっているということを知るには、自分が赦しの中に生きなければいけないということです。ですから、神の恵みの深さを、神に従順になり赦すことによってそれをますます豊か

に知っていくということです。

ですから、シナイ山においては天からその山に神が降りてこられました。けれども、イエス様は共に山の上に行かれました。イスラエルの民はシナイ山で神に近づけませんでした。イエス様は弟子たちをご自分に引き寄せています。聖なる方、正しい神であり、自分の罪深さを示されることにおいては同じですが、そこで悔い改めるものに神に近づける恵みがあるのです。

1C キリストの死

イエス様が死んでくださったのは、まさに、山上の垂訓にあるイエス様の教えに聞き従うことができるようにするためでありました。「キリストは、私たちがすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心な選びの民をご自分のものとしてきよめるため、私たちのためにご自分を献げられたのです。(テトス 2:14)」イエス様が死なれたので、私たちが縛っている罪が取り除かれ、心が清められ、それゆえに主に命じられたことを守り行なうことができるようになるし、良いわざに熱心になれます。

2C 聖霊の力

そして、自分たちがいかに良い行いをするのに、無力であるのか、自分は自分の力に対しては死んでいる、自分の肉は何も良いことを行なうことができないことを知ります。自分ではなく、むしろ自分には死に、御霊によって神が生きていただくことによるのみできます。御霊によって新しく生まれ、聖霊の力に満たされることによるのみ、これらのことを行なえます。

3C 霊的祝福

そして、山上の垂訓には「幸いです」というイエス様の言葉があるように、そこには幸いがあります。霊的な祝福があります。「神はキリストにあって、天上にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。(エペソ 1:3)」私たちにこのような、天上にある、霊的な祝福がありません。キリストにあってあります。山上の垂訓にある命令を守ることによって、その恵みの深さと豊かさを知るようになります。

4C 伝道

そして、山上の垂訓は、最終的に証しの力となります。「互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。(ヨハネ 13:35)」私たちがいくら、伝道をしたり、証しを立てようとしても、この実質がなければ力がありません。しかし、山上の垂訓の中に生きるのであれば、最終的に世が私たちがキリストの弟子であることを認めるようになるのです。

3A イエスの教え

山上の垂訓は、しばしば大きな誤解を受けます。これほど誤解を受ける、有名な言葉は少ない

でしょう。

1B すべてを信じる

その多くが、イエス様の教え全体を見ていないからです。イエス様は、「預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。(ルカ 24:25)」と言われましたが、山上の垂訓の教えにおいても、そのことが言えます。一部だけを取り上げて、文脈や他の御言葉との調和を考えずに、それを取り上げることが多いからです。

1C 八福

まず大事なものは、イエス様は初めに「八福」を語られていることです。幸いです、と言われて、何かを行なうことを教える前に、その内なる状態についてお語りになっています。しかも、「心の貧しい者は幸いです」という、自分には何もできないのだということが幸いですというところから始まっています。

2C 弟子たちへの言葉

ですから、多くの人たちが誤解をして、山上の垂訓を読んでいます。二つの過ちがあります。一つは、「誤ったところに適用している」という間違い。もう一つは、「正しいところに適用していない」という間違いです。一つ目の、「誤ったところに適用している」という過ちは、社会的福音と呼ばれるものです。社会に対して、イエス様の命令を当てはめることです。例えば、貧困対策のために政府に働きかけること。「敵を愛しなさい」というイエス様の命令を使って、国防や警察の武力を否定して、それに反対すること。この福音と呼ばれるものの過ちは、弟子たちに対するイエス様の命令を、信者でもない国や機関に当てはめることです。

この過ちは、しばしば私たちも個人的に行なってしまいます。信者でもない人に、私たちは自分たちに語られているイエス様の命令をできるように勧めてしまいませんか？教会生活をしていると、いつの間にかクリスチャン用語を身につけて、それをまだ主を知らない人々にも語ってしまっています。そして、キリストの弟子に語られている命令をその人たちにも当てはめて、それを行うようにプレッシャーをかけたら、それは社会的福音と同じ過ちを犯していることになります。この間違いは一体なんなのでしょうか？そうです、「心の貧しい者は幸いです。」「悲しむ者は幸いです。」この二つの教えが、山上の垂訓の前提になっていることを飛ばしてしまっているのです。倫理的なことを、福音に取り替えて教えているのですから。あるいは社会的なことに取り替えているのですから。

もう一つの間違ひは、「正しいところに適用していない」ことだと言いましたが、デイスペンセーション主義と言われる人々の中で、「これは旧約のモーセの律法時代のものであり、新約の教会には当てはまらない」とするものです。イエス様は、律法を再解釈しているだけで、律法をイエス様が完了された今、これらの戒めが自分たちには当てはまらないとすることです。これも、危険です。

確かに、イエス様の言葉はあまりにも基準が高いです。私たちには、到底できないことは一目瞭然です。けれども、だからこそキリストが十字架に付けられ、自分も十字架に付けられたことを知ることができます。そして、それによって罪が取り除かれ、聖霊が注がれたことを知っています。そして聖霊の力が与えられ、その力によってこれらのことを行なうことができることも知っています。

3C 歪曲しないための知恵

このように、私たちが山上の垂訓の戒めを、歪めないようにすることは大事です。イエス様が、ここで口を開いて、教えておられることに注目してください。そこには一種の躍動感があります。話の流れがあります。それを字義的に、機械的に解釈して、ただ当てはまればよい者ではないことも知っています。例えば、「誓ってはなりません」というところから、一切の誓約をしない、結婚式でも誓約しないという人々もいますが、イエス様が言われているのはそんなことではありません。また、「裁いてはならない」というイエス様の戒めに対して、一切の判断をしてはならないというように受け取り、判断すること自体を裁いてはいけないとして、裁くという矛盾もあります。こういったことは、やみくもにその額面を取るのではなく、イエス様の教えの流れの中で、そこにある真意を受け取って行かないといけません。

その反対に、何か抽象的な概念のように受け取ってもいけません。信条や思想のように取って、自分はその精神だけを持っていれば、具体的な実践にまで及ばなくてよいとします。これも間違いです。具体的に行なうことを、イエス様は命じておられます。

その他、イエス様は教えられる時に、一つの原則をまず語られ、それから例えを語られて、その教えを強固にするというところを行われています。心配してはいけないと言われて、それから空の鳥と野の花の話がされました。裁いてはいけないと言われて、それから兄弟の目にあるくずを取ろうとして、自分の目にある梁に気づいていないという話をされています。

2B 全体の構成

そして全体の構成ですが、5章において八福から始まります。3節から12節までです。それから、その幸いな者が世に対してどのような存在なのかを、地の塩、世の光ということで宣言されます。13-17節です。それから、神の義とパリサイ人や律法学者の義を比較して、彼らよりもまさる義でなければいけないと論じます。その例として、殺してはいけない、姦淫してはいけない、偽りの誓いをしてはならないということを取り上げ、敵に対しては愛しなさいという戒めを行われます。そこで浮き彫りになるのは、外側の行い以上に、天におられる父なる神との関係です。そして6章に入りますと、人前で見えるように善行を行ってしまう過ちが、施し、祈り、そして断食において語られます。そして後半には、世における財産との関わりについて教えられます。そして7章では、裁きについて語られます。